『30年前の出会いが今も』

向志帆

1　今から30年前の平成1年（1989年）3月20日、箕面市役所内で、悪質な差別投書事件が発生しました。被差別部落出身の職員さん（仮にAさんと言います）の更衣ロッカーに、Aさんを名指しした「手紙」が入っていたのです。差別用語を使ってAさんを誹謗中傷し、「職場から出ていってください」と書いた、非常に悪質極まりないものでした。

2　Aさんは、強いショックや恐怖を乗り越えてそのことを公表し、全職員が大きな衝撃を受けました。

3　労働組合等を中心に、毎週のように職場集会が開かれ、部落差別等についての学習会や意見交換会が頻繁に行われました。その

中で、「実は私も被差別部落出身で…」と、自分のつらい被差別体験を語る人が、多く現れました。

4

私は、学校で「同和教育」は学んでいましたが、実際に被差別部落出身だと名乗る人に会うのは初めてでした。その人たちに対する私の第一印象は、「なんだ、私と同じ普通の人じゃん」ということでした。それまで、つらい差別や困難な運動の中に身を置く人たちが、何か自分とは違う特別な人のように思っていたのです。

5

その時から、私の「差別」とか「人権」に関する考え方が、大きく変わりました。大切な問題ではありますが、何も特別なことだと構えることはない。人に会って意見や気持ちを実際に聞き、一緒に考えていく、それでいいし、それが大切なんだと思うようになりました。実際に「出会う」ということが、い

かに大切なことなのかを実感しました。

7

今でも、30年前の当時に出会った方々が、いろいろな場面で仲良くしてくださり、私を助けてくださっています。現在、「人権」にかかわる仕事をしていますが、あの30年前の事件、Aさんの勇気と、そこで出会った方々、「なんだ、普通じゃん」という感覚は、大切にしたいと思っています。「出会ったからこそわかることがある」と思うからです。

20 × 20